

# 「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」

マタイ 6 : 11

堀田修一 22・7・17

I 主の祈りは、祈りの中で最高の祈り。主の祈りはすべての原則、要素を含む祈り。神である主イエスが教えられた祈り故。主の祈りの内容を思い起こしたい。「天にいます（天と地を創造された偉大なお方、天と地のすべてを支配しておられる摂理、ご計画の神、全能のお方）私たちの父よ（本来、近づけないほどの偉大な方が、主を信じる者を神の子どもとして愛してやまない、暖かい完全な霊的な親。神の子どもとされた私たちに恵もうと待っておられる）。御名が聖なるものとされますように（御名、神御自身が、世界で唯一の本物の神として聖別され、御名が崇められますように。私たちは、神を崇め礼拝するために神に造られ、救われた。神は私たちが御名を崇め賛美し感謝し神を礼拝するのを最も喜ばれる）。御国が来ますように（御国＝①現在、神の支配が私たちの心に来ますように。私たちが、福音を聞き主イエスを主、神、ご主人と信じ、主を心に迎えるとき、私たちの心に神の国が宿る。自分の罪を告白し続け、主を心の王座に迎え続けるとき、神の国は、私たちの心で広がり、神の支配領域は広まる。福音の世界宣教により救いが広まり、世界の一人一人の心に神の国が来ますように。主の祈りは「宣教の祈り」でもある。②将来、主の再臨により、人と全被造物が全く新しくされ、新天新地、神の国、神の支配が完成し、神が造られた人間と全被造物により神の御名が崇められる礼拝が献げられますように）。このような意味を込めて心から主の祈りを祈り続けたい。9節の主の「こう祈りなさい」の原語は、こう祈り続けなさいの意。「主の祈り」が心から世界中で意味をかみしめて祈られ続けるとき、御聖霊によるリバイバルが起こる事を信じ求めたい。「みこころが天で行われるように、地でも（人の支配ではなく神の支配、みこころが）行われますように」：10。主の祈りの祈りには深い関係がある。

①「御名が聖なるものとされ御名があがめられるとき、

②「御国（唯一本物の神の支配）が来て、神の国、神の支配が拡大する。御国、神の支配が来るとき

③「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」が実現する。

主は、主の祈りの順序で、まず神を第1とする3つの祈り、次に私たちの必要の3つの祈りを教えられた。次のみことばとの一致「まず神の国（神への賛美と神の支配）と神の義（みこころ）を求めなさい。そうすれば、これらのもの（真に必要なもの）はすべて、それに加えて与えられます」6：34。

II 主は「主の祈り」の順序で、まず前半で神を第1とする祈りを献げ、後半で、自分たちの正直な願いを父なる神は喜ばれる事を示しておられる。「私たちの日ごとの糧を、今日もお与え下さい」：11。天と地を創造し、今も、すべてを支配しておられる偉大なお方が、私たちが心から愛し、小さな私たちの日ごとの必要まで気にかけて、満たして下さるといふ祈り。父なる神の許しがなければ、一羽の雀も落ちない。私たちの身に起こることに偶然はなく、父なる神の許しと意味とご計画がある。「あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられている」と言われる。マタイ10：29－30。天と地、宇宙の全能の偉大な方が、小さな私たちのあらゆる部分や

方面に関心を持って下さる恵みを私たちが信頼し確信できますように。主が関心を持っておられない頭の毛も人生の隅々の出来事もない。小さな私の生涯の最小の微妙な部分に至るまで、永遠の御座におられる方が知っていて下さる。「みこころが天で行われるように地でも行われますように」から「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」に直行する祈り。これが神のみこころ。「わたしは、高く聖なる所に住み（主の祈りの前半）、砕かれた人、へりくだった人とともに住む（主の祈りの後半）」イザヤ57：15。これが、贖い、救いの奇蹟。これこそ受肉の意味。受肉は、主イエスがこの地上にいる私たちを全能者、栄光の神に結びつけ、この地上にいる私たちを抱きしめる。「神の国、みこころ」を求める直後に「日ごとの糧」を求める祈り。

1. 私たちが祈り求めるものは、真に必要なものであるべき。本日の祈りの「日ごとの糧」の別訳は「必要な糧」。また、この祈りは、「私の」日ごとの糧ではなく、「私たちの日ごとの糧」とある。ここに深い愛の祈りがある。この祈りは、私個人の日ごとの糧だけではなく、世界中で日ごとの糧もない人々に必要を与えてくださいという愛のとりなしの祈りでもある。何と深い愛の祈りだろう。神を深く知るある方は、このように言っている。「多くの人々は次のように考える。父なる神は私たちに大きな恵みの賜物を、大量の一括払いにしてくださる。私たちは、それをいただいたら、その後はそれで生活していくのだと。しかし、事実はそうではない。大量の一括払いは私たちにとり実に危険である。もし神が、素晴らしい恵みの賜物を全部一括払いにして下さったら、私たちはその賜物に夢中になり支配され心が奪われ（富や物に依存する偶像礼拝）、すべての与え主の神を忘れてしまう」。つまり一日一日、神に頼ることをしなくなる。私たちの理解を超える愛だが、神は、私たちが神に語りかける祈りを神は霊的な父、霊的な親として喜ばれる。神は、この点では地上の親の心をお持ち。地上の親は、自分が子どもに、何年分の贈り物を与え、その蓄えを使い果たすまで、親との会話、交わりを一切持とうとしない子どもなら、傷つき寂しく思う。親は、子が来て話しかけるのを喜ぶ。父なる神も同じである。神は、私たちに、生涯の必要を全部一括払いにはされない。日ごとの糧、必要を分割払いで下さる。神は真実と恵みにより、ご自分の保証をし続けてくださる。神は、私たちが、日ごとに、みもとに行き、祈り、神と交わるのを喜ばれる。神は、神の子どもである私たちの祈りに耳を傾けることを喜ばれている。これは、驚くべき恵みである。天地を創造し、星の運行をつかさどっておられる神が私たちの賛美、礼拝を喜ばれ、私たちの願いを聞くのを喜ばれる。それは、神が愛であるから。だからこそ、神は私たちの必要全部をご存じであっても、私たちが、日ごとの糧、必要を一日一日求め祈り神と交わる事が、神にとり大きな喜びなのである。
2. この祈りには、もう一つの強調点がある。それは、私たちが、神に全面的に依存していること、日ごとの糧でさえそうであることを、肝に銘じ自覚する事である。おそらく、本日、この説教を聞いておられる多くの方々は、神の恵みで、本日の昼食と夕食分は与えられておられると思われる。では、主は、あえて、主の祈りで「日ごとの糧を、今日も与えてください」と真剣に祈りなさいと教えられたのか。それは、命、体、酸素、日ごとの糧、必要が与えられている恵みは、何一つ当然、当たり前のものではないと自覚するための祈りである。ある方は、目の前の食事のために真剣に祈られる必要がある。この祈りは、糧は神が与えてくださるので仕事は必要ないという意味ではない。神は仕事を与え、糧を与えて下さる。仕事ができない人には神の方法で満たされる。神のお心一つで、私たちは日ごとの食物も食べられなくなる。神は太陽とその恩恵を止めることができ、雨を止めることができになる。この世界の地を荒地とし、

農夫の人々がどんなに近代的な農機具と肥料をつぎ込んでも、作物が全くできないようにすることもおできになる。私たちは、徹頭徹尾、神の御手の中にある。人間の愚かさは、科学や技術が進むにつれて、神から自立していると勘違いすることにある。実は、私たちは、神の恵みなしには一日でも生きられない。神が支え保って下さらなければ、何一つ続かない。「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈るたびに、私たちの命、時間、健康、存在自体が神の御手にあることを思い起こしたい。食事の前に感謝の祈りをするたびに、主の祈りが答えられて、今、食べることができる恵みを感謝したい。食前の感謝の祈りをすることは非常に良い習慣である。私たちの食物、その他必要なもの、霊的なみことばの糧もすべて神から来る。私たちは全面的に神の恵みと憐れみに依存している。心から神に感謝したい。

祈り：「私たちの日ごとの糧を、今日も与えてください」と日々祈る者として下さい。この祈りが答えられ、日ごとの糧、着る物、住まい、必要なもの、信仰が養われる霊的なみことばの糧、命、体、祈り支えてくれる人、真の神を礼拝できる教会、多くの支えを感謝します。何一つ当たり前のものではありません！すべて恵み！